

田舎暮らしを楽しむ

(2)

佐藤 彰啓



自慢の薪ストーブの前で語らう宮澤夫妻
(長野県大町市)

田舎暮らしを夢見るサラリーマンは多いが、乗り越えなければならぬ課題も多い。
最初に訪れる壁は家族、とりわけ配偶者の同意を取り付けることである。「私はデパートのあるところでなければイヤ」と妻に言われては諦(あきら)めざるを得ない。「田舎暮らしは男のロマン」としばしばいわれるゆえんである。
神奈川県茅ヶ崎市から長野県大町市に移り住んだ宮澤章さん(67)、淑子さん(62)夫妻の場合を紹介しよう。章さんは定年の三年前から、田舎暮らしを考え始

今後の人生語り合い 一致点

家族の同意

めた。若い頃は山男で、山岳会を率いて海外の八千メートル級の山々に挑んだ経験を持つ。年を重ねるうちに、山の近くで暮らしたくなっていた。

しかし、妻の淑子さんは地元に興味の友だちが多く、見知らぬ土地に住むことに不安を感じることは目に見えていた。

そこで章さんはまず、淑子さんを気楽な田園旅行に誘うことから始めた。毎月のように週末になると、立山連峰や信州の山村など

へドライブに出掛けた。初めて物件を見たのは飛騨の山奥だった。何年も使われていない農家の廃屋。淑子さんは「人里離れたこんな一軒家？周りに家がなくては…」と心細そうにしていた。

二人が求める老後のイメージを真剣に話し合うようになったのは、その時からだ。都会から田舎へ移った人の話も聞いた。「私も初めは不安だった」という話は大きい勇氣づけられた。

最後には淑子さんも同意し、六年前に二人で大町市へ移り住んだ。「朝、カーテンを開けると、窓いっぱいに残雪の北アルプスが見えます。本当にここにきてよかったです」。以前、住んでいた茅ヶ崎から友人も訪ねて来る。淑子さんは今の暮らしに満足げだ。章さんは「いきなり妻に了解を迫らず一緒に行動し、これからの人生を語り合いながら、二人の一致点を見出したのがよかった」と振り返る。

定年後の田舎暮らしは新たな人生の始まりともいえる。その想いを妻に告げるのは、第二のプロポーズでもある。

(ふるさと情報館代表)